

大妻女大家政 ○金高 薫 吉岡 徹

目的 日本において近世は、特徴的美的表現が発展を遂げた時代でもある。町人階級の富やエネルギー、文化、風俗の趣味が複雑多様に絡み合い、そこには、洒脱な美意識が生まれた。服飾は、単に形態変化するだけでなく、様々に変化する社会現象とともに、それに携わった一流の文化人、芸術家との相乗効果によるものといえる。今回、そのような時代に活躍した尾形光琳の作品を基に服飾の美意識について考察した。

方法 『「いき」の構造』、『日本染色文様集』、『日本の文様』の参考資料より関係する色と文様を選出し、いき、すい、わび、さびについて検討した。

結果 近世の色彩は、自然感情と色彩感情を豊かに盛り込んだ、いわゆる色気のある、味わい深い色を基調とする茶系統が多く見られた。そして、尾形光琳の考案した文様“梅”、“波”などは、町人の服飾表現に多く見られ、日本の美意識“いき”に通じるものが伺えた。それが後年の、日本の美意識の基準の一つになったとも思われた。